近畿地方の万葉集と風景画シリーズ（第三十五回）

「大化改新発祥地・談山（たんざん）神社」

吾（われ）はもや　安見児（やすみこえ）得たり　皆人（みなひと）の　得（え）かてにすとふ　安見児得たり。　作者　藤原鎌足（巻二―九五）

（解説）私はまあ安見児を得た。皆の人が手にいれかねるといふ安見児を得たことだ。

①題詞には「内大臣（うちのおほへつきみ）藤原郷、采女安見児（うねめやすみこ）を娶（めと）る時に作る歌一首」となっている。

②題詞にある「采女」は古代以来、天皇のおそばに仕えて御食事の世話など雑事に携わった宮中の女官のこと。

③「安見児」はその采女の名。伝不詳。

④臣下との結婚を禁じられていた采女を、藤原鎌足だけが妻となしえた喜びを誇示した宴歌であるとの説がある。

⑤この歌の作者・藤原鎌足公は飛鳥地方の東方にそびえる多武峰（とうのみね）の山中にたたずむ談山神社（現・奈良県桜井市多武峰）。の御祭神として祀られている。

⑥談山神社の本殿裏山の談山（かたらいやま）において中臣鎌子連（なかとみのかまこのむらじ）（後の藤原鎌足）と中大兄皇子（なかつおおえのみこ）（後の天智天皇（てんじてんのう））は極秘に当時権力を握っていた

蘇我入鹿（そがのいるか）暗殺の計画を練ったとされている。皇極天皇４（６４５）年にクーデターが成功し当時の豪族を中心とした政治から天皇中心の政治へと移り変わったとされている大化の改新を断行した。このことからこの地は「大化の改新談合の地」と伝えられ、社号の起こりとなった。

（参考文献）日本古典文学大系、澤瀉久孝「万葉集注釈」、新著日本古典集成等

（写生地）境内に建つ十三重塔は藤原鎌足を弔うため藤原鎌足公の長子が飛鳥時代の６７８年に建立した。現存している建物は室町時代の１５３２年に再建されたもので、木造十三重塔としては世界唯一の貴重な建造物であり談山神社のシンボルである。この十三重塔と背景に談山を描く。

（池田杏花）